

ジュサラの持続的生産を

セ・バーラス森林農法プロジェクト(下)

元企業家のジルベルトさんは、農家に転身して10年余り。「環境に良い影響を与えるアグロフォレストリーの概念そのものが素晴らしい。自分は魅了されている。政府からもっと支援があるべき」と熱を込める。

しかし、同区でアグロフォレストリーに取り組んでいるのは、ジルベルトさんを含む2、3人。多くはバナナ栽培に従事し、住民の間で広がっていないのが現状だ。

「この人々の生活は決して楽ではない。(パルミットの)素晴らしい代替策となりうる、非常に良いプロジェクト」と喜ぶのは、一行が2日目に訪れたリオ・プレット区在住のジェラルド・フランシスコ・デ・アギアルさん(57)だ。

一行を歓迎しつつも、「グアピルヴーには比較的日本系がいるが、ここは非日系人ばかり。まずは教育から始める必要がある」と懸念を示す。

「夢だけで終わらせず、収入を確保することが不可欠」(ジェラルドさん)。アグロフォレストリーの研究者や学生、観光客などを受け入れるポウザードを設置したり、女性達が手芸品の販売などを行うことで、住民の生活向上を包括的に図ることがねらいだ。

約50年同区に住み、アグロフォレストリーに取り組み村長のオリンピック・ローザ・ダ・シルバさん(77)は、自身のバナナ園でコーヒー、レモンなど約10種を混植している。

同区は人口約3000人。バナナや米、フェイジョンなどを栽培しているが、パルミット収穫で生計を立てる人も多いという。「全く新しいことだから、色々と考えながら進めていかないと。でもうまくいくことを願っている」と前向きだ。

一行はプロジェクトの成功を祈り、ジュサラとコーヒーの苗30本ずつを記念植樹した。プロジェクトはもともトメアスーのアグロフォレストリーについて研究していた東京農業大学大学院講師、山田祐彰さん(48、茨城)の提案によるもの。期待したい」と山田さんはいう。



リオ・プレットの自治会館前で。一行と住民の皆さん

説明によればこのプロジェクトは、実施にあたりトメアスーや近隣日系コロニアの経験を活かすだけでなく、トメアスーがセッテ・バーラス、海岸地域での河畔林再生メカニズムを学ぶ、という相互交流・協力を行うことに意義があるという。

既にJICAブラジル事務所によってトメアスーとセッテ・バーラスの3人ずつの相互訪問が実施されている。山田さんによればパラ州では河畔林保全はないに等しく、「農牧畜開発の環境への影響は最近になって意識され始めており、サンパウロの先例に学ぶべきことは多い」という。

トメアスーの遷移型アグロフォレストリーは伯政府から社会技術として認定されたものの、他地域への技術移転のためには定義づけを整備する必要がある。その意味でも、良い機会になると山田さんはみている。

「夢では終わらせない」 環境保護と村の発展めざし

詩穂記者